



## 熊川 嘉一郎



を私たちが強く意識する時代でもなかったことも影響していたでしょう。また、商品を購入されるお客さまにおいても、障害者が頑張ったのだから買ってあげようといった、半ば“温情”的な優しさで求めていただくことも多かったのではないかと思います。

ただ、この10数年で、販売する商品に対する私たち福祉事業所の考え方が大きく変わってきました。“趣味のお菓子”を作っている事業所は見られなくなり、それぞれが市場商品に負けない価値を持つ商品を作り出そうと工夫を重ね、取り組みを進めています。

ライン工房で製造したお菓子類は、熊本市内等の TSUTAYA さまなどいくつかの協力店にて販売していますが、そういう販売形態を採る中で私たちが常々「こうありたいなあ」と思っていることがあります。それは、先のメールのように、たまたま出掛けたお店でその商品を目にして購入され、食べてみたらとてもおいしく感じ、どこで作っているのだろうと包みの裏のシールを見たら「ライン工房」とあり、どうやら福祉事業所で障害のある人たちが作っているようだ気づいていただくことです。

決して温情からではなく、商品の力そのものの魅力でご購入いただくことが必要だと考えています。ですので、障害者が作ったということをアピールしない中で売れる商品をこそ、私たちは作っていきたいものです。また、そういったことを通して、障害のある人たちがこれほどの仕事ができるのだ、それだけの可能性と力を持っているのだということを皆さまに知っていただくことが、彼らの力を知る私たちの役割でもあると思っています。

これからもその思いを携えながら、ライン工房全員で皆さまに喜んでいただける商品を作り続けてまいります。

少し前のことになりますが、ライン工房に次のようなメールが届きました。

先日、住宅メーカーで行われたイベントで出されたお菓子を食べました。

大好きなフロランタンでした。

とても美味しかったです。

ラベルを見ると社会福祉法人ライン工房とありました。

検索してみると、どういう方々が作られているのかがわかりました。

毎日一生懸命作られたお菓子なんですね。

家族でおいしくいただき幸せな気持ちにさせてもらいました。

1歳と2歳の子どもの笑顔で美味しそうに焼き菓子をほおぼっていました。

ありがとうございました。

名無しのものですが、お礼まで！

嬉しいことに、時折ではありますがこのようなメールをいただくことがあります。

私どものような障害者福祉事業所の製品はどうしても「品質や味は今一つだろう」と一段低く見られてしまうことがあります。確かに一昔以上前の時代は、どちらかという趣味のお菓子的なものを作って販売している作業所もあったように思います。お菓子作りに関しては素人である福祉職員が指導して作るお菓子でしたし、今のように「消費者ニーズに応える商品を作り、利用者に支払う工賃をできる限り向上させる」ということ